

**ふたなりイジメっ娘を
完全屈服させて
わたし以外には勃起しない
フツウの女の子に戻してあげた**

エロバトルン文庫

■登場人物

風見 レイナ

転校してきた黒髪ロングの優等生。極太巨根で更生させられたふたなり娘は彼女以外では勃起できなくなる。

松里 マリ

金髪ギャルのふたなりイジメ娘。イジメのターゲットをレイナに変えて、ふたなりを見せつけてくる。

宮園 アヤ

黒髪ツインテールの地味娘。マリにイジメられていたが、かまってもらえなくなり、レイナに逆恨みしてくる。

水瀬 ハルカ

レイナたちの担任のショートヘアの爆乳教師。仕事にやる気がない。興味があるのは……

1. ふたなりイジメっ娘を完全メス堕ちさせて、わたし以外には勃起しないフツウの女の子に戻してあげた。

「ごめんなさい！ごめんなさい！もう、誰もイジメたりしないから♡ゆるしてください！お願いします♡何でもします♡だからあ♡♡♡もうお精子ぴゅっぴゅっぴゅできなくなっちゃうよお♡♡♡」

ずぶ♡♡ずぶぶぶ♡♡♡ずぼずぼ♡♡♡

転校生のわたし、風見レイナにふたなりちんぽをぶち込まれて、トコロテン射精をしまくり命乞いをしている哀れなふたなりイジメっ娘、松里マリ。

「連れションしたかったんでしょ？ほら男性用便器にびゅーびゅー♡最期の無駄うちしなさいよ。見ててあげるから」

わたしの長い黒髪と大きなおっぱいが、金髪ギャルのマリの綺麗な髪と巨乳に合わせて揺れ動く。

「あうう♡はうううう♡♡♡金玉のお精子もう無くなっちゃったのにい♡♡♡まだ射精したいって♡♡♡おちんぽがおちんぽがあああ♡♡♡」

手でしごくまでもない、ガン立ちのふたなり金髪ギャルちんぽが白い精液を滴らせながら、必死に射精を我慢してふるふると震えている。

「んふー♡終わりだからね。これが最期のふたなりちんぽ射精だよ。ほら♡たっぷり味わいなさい！」

パンパン♡パンパン♡♡♡

ちんぽを突き上げるごとに、揺れる褐色のギャルの巨乳と勃起ちんぽ♡

今射精してしまったらもう二度と勃起できない……身体がそう訴えかけているのだ。そして……その時が来てしまう……

「いやあああああああああ♥♥♥♥♥だめだめだめええええええ♥♥♥♥♥ちんぽイク！ふたなりちんぽラスト射精して♥勃起できなくなっちゃう♥♥♥♥♥ふたなりちんぽでみんなをイジメたのにい♥♥♥ちんぽ使えなくなったら♥また、あたしがイジメられるのおおおお♥♥♥♥♥♥たすけてええええ♥♥♥♥♥たすけてええ♥♥♥♥♥フツウの女の子に戻っちゃうよおおお♥♥♥♥♥」

「んふう……一人で盛り上がってバカみたいよね？あなた。一時間前の威勢の良さはどこにいったのかしら？」

「ごめんなさい……調子に乗ってました♥♥♥♥♥ああああああああ♥♥♥♥♥」

～1時間前～

「風見レイナです。よろしく……」

転校初日の差しさわりのないあいさつを済ませ、わたしは自分の席を担任の水瀬ハルカ先生に尋ねる。

「そうね……レイナさんの席は」

「はい！センセーあたしの隣があいてまーす♥」

手をあげたのは、教室の一番後ろの端に座っていた胸のデカイ金髪ギャルだった。

んふう……バカに目をつけられたか。わたしは静かに勉強だけしていたかったのに……

しかも、お前の隣って人いるじゃん。わたしと同じ黒髪でツインテールの気弱そうな、女の子が……

「え？え？マリさんの隣って？ここですよ？ここってアヤの席……」

おろおろしている可哀そうな女の子に、金髪ギャルから容赦のないけりが飛ぶ。

「はあ？あたりまえじゃん！レイナちゃんの席は今日からソコなんだよ！お前は他のところ行ってろよ！」

「うう……そんなあ……」

涙を流しながら女の子は、荷物を抱えて他の空いている席に逃げていく。

「それじゃあレイナさんはマリさんの隣ね♥」

え？今の放置するんですか？先生。

はあ……この学園ハズレだわ……失敗した。

とりあえず強引に決められた自分の席に座ろうとすると、肩をがっしりとつかまれる。

「よろしくね♥あたし松里マリ♥ねーレイナちゃん♥今からトイレ♥一緒にいこ？」

「はあ？いきなり何で……」

「じゃーセンセーちょっとトイレ行ってきまーす♥」

金髪ギャルは水瀬先生の返事を聞くまでもなく。わたしと肩を組み無理やり教室の外へと連れ出していく。

マリのふにゆふにゆした巨乳の感触にわたしのスカートの中身がピクン♥と反応した。

「んふう……まあ、いいか♥ちすつきりさせたかったところだし……」

わたしは、デカ乳金髪ギャルのマ리에女性用トイレに連れ込まれた。

～学校的女子トイレ～

そこには男性が立ったまま用を足す、トイレも3つほど並んでいた。

「あたしはこっちだから♥レイナちゃんは座ってゆっくりおしっこしなよ♥」

そう自慢げに言いながら、マリはボロン♥と股間からイチモツを取り出した。

見せつけるようにブラブラとちんぽを揺らし、わたしを挑発してくるふたなりの金髪ギャル。

そう、ここはふたなりの女の子も通う学園だったのだ。

とは言ってもふたなりは珍しく、女の子どうしてもいきなりちんぽを見せつけられることになれていない子がほとんどだ。だから……

「ん？アレ？反応うっすいなあ……ちんぽだよ。ち・ん・ぽ・♥レイナちゃんは見ただことないのかなあ？」

わたしが「きゃああ♥」とか愛らしい反応すると期待していたのかもしれない。

マリは腰を左右に振りながらちんぽをぶらぶらさせ、わたしの気を引こうと必死だ。

ぶるん♥ぶるん♥ぶるうん♥♥

「そう、わたしもこっちだから……」

わたしはフリチン姿で、ちんぽをぶらつかせるマリの横を通り、男性用便器の前に立ち自分のちんぽを取り出した。

ブルルルンツ♥♥♥

「で、でか！？な、ななな！なによソレ！？」

人のちんぽを見て「なにそれ」とは、失礼な奴だ。

「は？ちんぽよ。ち・ん・ぽ。見たことないの？」

わたしがニヤニヤ笑いながらちんぽを片手で持ち上げ、ふりふり振って見せる。

マリのちんぽも大きい方なのだろうが、普段じぶんのおちんぽを見なれているから可愛い皮被りおちんぽにしか見えない。

「くっ！ち、ちんぽはね！大きさはじゃないのよ！発射力よ！見てなさい……う……うん♥♥♥うう……あ♥あはああああ♥♥♥」

マリは男性便器におしっこを出し始める。

じょぼじょぼじょぼ！じょぼぼぼおおお！

なかなかの量のおしっこがマリのおちんぽから、じょぼじょぼと音を立てて便器に流れ込んでいく。

「ふふん♥あたしの精液はいつもこれくらい出るのよ♥水瀬センセーやアヤなんかあたしの射精が子宮直撃しただけでイっちゃうんだから♥♥♥はう♥ふうう……♥♥♥」

ちよろちよろと勢いのなくなってきたおしっこが、したたりおちていく。

放尿の快感に満足したマリがドヤ顔でこっちをみてる。

そうなのか……やっぱりあの先生こいつとやってたんだなあ……

アヤって子は、さっきの可哀そうな黒髪ツインテールの子かな？。

あんな大人しそうで可愛い子まで、ふたなりちんぽの毒牙にかけるなんてうらやま……許せないわ！

「ふうん……そう、わたしもかなあ。精液これくらいでちゃうかも……んふう……♥♥♥」

ちよろちよろちよろ……

「ぷっ♥あはははは♥なにそのしょぼいおしっこ♥」

じよろじよろじよろ.....じよぼじよぼじよぼおおお♥♥♥

「ん？んん？ま、まあそれくらいあたしだって.....」

じよおおおおお♥♥♥♥ふびゃああああああああ♥♥♥♥じよごごごごおおおおお♥♥♥♥♥

「ひっ！なによそれ！きゃああ♥ちょっと飛び散る！レイナのおしっこあたしにぶっかけられてるって！」

「ふう.....んふう♥♥♥はあでてる♥」

「おい！ふざけんなよ！おしっこ、足とお股にかかっちゃっただろ！きれいにしろよ！」

マリの太ももや股間にわたしのおしっこが飛び散ってしまったようだ。

「え——。自分でふきなよ、めんどくさい」

「てめえ！立場わかってんのかよお！お前はクラスで一番ふたなりちんぽのデカくて、可愛いマリ様の肉便器に選ばれたんだよ！
転校したての地味な陰キャ女は！おとなしくあたしのふたなりちんぽに犯されなさいよ！！おほおおおおおおおおお！！？」

ずぷぷぷ♥♥♥

上の口がうるさいので下の口をちんぽで塞いでやった。

「あんたの言い方だとふたなりちんぽがデカイ奴が一番偉いんでしょ？
わたしのちんぽのほうが大きいよね？じゃあ、あんたが犯される番じゃないの？ほら♥ほら♥」

ずぼずぼおおおおお♥♥♥ぷちぷち♥ぷちゅ♥

ちんぽをマリのおマンコを容赦なくえぐる。ぷちぷちいう感触。

……こいつ処女か。めんどくさい。

「あ……ああああああああ♥お、おまえ！おまええ！ふざけんなよ！何簡単にあたしの処女奪って……ひぐ！ひどい！おほ♥おほおほおほおほおほおほ♥♥♥♥」

「あんたこそ立場わかってんの？わたしのちんぽをイラつかせた、しょぼちんふたなりが♥ただで済むはずないでしょ？それにまだ、わたしのちんぽスッキリしてないんだよね……ほら！しっかり締め付けなさいよ肉便器のマリちゃん♥」

ズンズン♥ズポン♥♥♥

「あひゃああああああ♥♥おほおほおほおほおほ！すご！おほ！すごちんぽ！すご！おほほ♥トコロテン射精しちゃう♥♥♥おほ♥♥レイナのふたなりちんぽすご♥♥♥♥おほおほおほおほおほおほ♥♥♥♥♥♥」

びゅ♥びゅびゅううう♥♥♥♥

マリのちんぽから身勝手な精液が便器のなかにぶちまけられる。

「ちょっと！もう射精したの！？ちんぽちいさいうえに、よわよわな早漏ちんぽじゃん！恥ずかしくないの？」

わたしが射精していないのに、勝手に盛り上がってお漏らしする肉便器にさらにちんぽがイラついてくる。

「あう♥だって……レイナのちんぽ気持ちよくて♥」

「言い訳するな！ほら！もっと絞めろ！処女まんこのくせにゆるいんだよ！使えない肉便器ね！ちんぽから精子ぴゅっぴゅ漏らすだけのザコふたなりギャルがイキってんじゃないわよ！」

ずりずり♥♥♥ずぶぶ♥♥♥♥

びゅるるる♥♥♥

「あ♥ああああ♥ごめんなさい！あたしのほうが調子乗ってました♥♥♥レイナさまのおちんぽがこんなに長くて♥太くて♥気持ちいいって知らなかったから♥♥♥♥あたしのゆるゆるマンコ使ってください♥ありがとうございますうううう♥♥♥♥おほおほおほおほ♥♥♥♥」

きゅんきゅん♥締め付け謝罪をしてくるマリのおマンコ。

「あれえ？ちゃんと卑屈な謝罪できちゃうんだねえ？ひょっとして、あんた学園デビューしちゃってたとか？」

ちょっと興奮しながら、わたしはちんぽをマリのナカにぶち込み続ける。

「ち、ちがうし！ああああん♥♥♥あたし前の学校でふたなりだからって、ひゃん♥♥♥イジメられてなんかいないし！あひいいいい♥♥ちんぽすごお♥♥♥♥」

「だよねえ♥♥♥♥金髪ギャルのちんぽが二番目にデカイ、ふたなりマリちゃんが元いじめられっ子なわけないよねえ？ふたなりちんぽが珍しいからってイキってセフレ作りまくって、学園デビューできたのかもしれないけど……あんたさあ……もう勃起できないからね♥可哀そう♥♥♥」

「あひっひいい♥♥♥♥え？なにいつてるの？」

びゅるびゅるるるる♥♥♥

「あんた、もうふたなりちんぽで勃起できなくなるんだよ？わたしの極太巨根に犯されたふたなりイジメっ娘たちは、みーんな気持ちよすぎて♥ふたなり精液全部出しつくしちゃって♥もう二度と勃起できなくなるんだよ？」

「う、うそよ……うそ！そんなこと……」

びゅううう♥♥♥びゅびゅううう♥♥♥

「わかるでしょ？マリちゃん♥自分のおちんぽのことだもん♥

いま♥ありえないくらい勃起してるでしょ？射精がびゅっぴゅ♥止まらないよね？すごい気持ちいいよねえ？

こんな快樂がわたしの極太巨根以外で感じられると思う？無理だよな？

だから♥他のふたなりイジメっ娘たちも、みーんな♥わたしの極太巨根でないと勃起できないフツウの女の子になっちゃったんだあ♥♥♥♥

わたしがふたなりにとって、残酷な最期通告を言い放つ。

「やだ.....やだやだやだああ!!!ちんぽ勃起できなくなるのいやあああ
あ!おちんぽ鍛えておつきしたのに!クラスのみんな犯してやっと居場所
ができたのに!ふたなりちんぽ勃起できなくなったら.....」

びゅううう♥♥びゅびゅうう♥♥♥

「また.....イジメられちゃうよね♥」

「ひぎいいいいいいいい!!?レイナのおちんぽまた大きく♥♥♥♥おほお
おおおおお♥♥♥♥ちんぽしゅごい♥トコロテンとまらにゃい♥♥♥♥」

ずぶずぶぶううう♥♥♥

びゅびゅううう♥♥♥びゅるんびゅるん♥♥♥

「ごめんなさい!ごめんなさい!もう、誰もイジメたりしないから♥ゆるしてくだ
さい!お願いします♥何でもします♥だからあ♥♥♥♥もうお精子ぴゅっぴゅできな
くなっちゃうよお♥♥♥」

ずぶ♥♥ずぶぶ♥♥♥ずぼずぼ♥♥♥

びゅるるる♥♥♥びゅびゅううう♥♥♥♥

わたしに極太ちんぽをぶち込まれて、トコロテン射精をしまくり今更の命乞い
をしている哀れなふたなりイジメっ娘、松里マリ。

「連れションしたかったんでしょ?ほら男性用便器にびゅーびゅー♥最期
の無駄うちしなさいよ。見てあげるから」

「あうう♥はううう♥♥♥ちんぽのお精子もう無くなっちゃったのにい♥♥♥まだ射精したいって♥♥♥おちんぽがおちんぽがあああ♥♥♥とまってええ♥♥♥とまってえええええ♥♥♥♥」

手でしごくまでもない、ガン立ちのふたなりギャルちんぽが白い精液を滴らせながら、必死に射精を我慢してふるふると震えている。

「んふー♥終わりだからね。これが最期のふたなりちんぽ射精だよ。ほら♥たっぷり味わいなさい！」

パンパン♥パンパン♥♥♥

ちんぽを突き上げるごとに、揺れる褐色のギャルの巨乳と勃起ちんぽ♥

今射精してしまったらもう二度と勃起できない……身体がそう訴えかけているのだ。そして……その時が来てしまう……

「いやああああああ♥♥♥♥♥だめだめだめえええええ♥♥♥♥♥ちんぽイク！ふたなりちんぽラスト射精して♥勃起できなくなっちゃう♥♥♥♥♥ふたなりちんぽでみんなをイジメたのにい♥♥♥ちんぽ使えなくなったら♥また、あたしがイジメられるのおおお♥♥♥♥♥たすけてええええ♥♥♥♥♥たすけてええ♥♥♥♥♥フツウの女の子に戻っちゃうよおおお♥♥♥♥♥」

びゅびゅううう♥♥♥びゅるるるううう♥♥♥ぶびゅるるるううううううう♥♥♥♥♥♥♥♥♥どびゅ♥

「んふう……一人で盛り上がってバカみたいよね？あなた。一時間前の威勢の良さはどこにいったのかしら？」

わたしはマリのデカ乳をもみまくる。

「ひぎいいい♥♥♥♥♥だめええ♥♥♥そんなにめちゃくちゃにおっぱい♥もまないでええ♥♥♥♥♥」

「やわらかーい♥♥♥いいじゃない♥このおっぱいがあったら♥みんなにご奉仕できるでしょ？わたしのおちんぽも毎日このおっぱいでパイズリしてもらおうかなあ♥」

乳首もちんぽも完全勃起のマリだが、心はぽっきり折れていた。

「ごめんなさい.....調子に乗ってました♥♥♥♥ああああああああ♥♥♥♥レイナ
さまああ♥♥♥ゆるしてくらさいいい♥♥♥マリが全部悪かったんですう♥♥♥」

泣きながら謝罪射精しまくるマリが可愛く思えた。だから.....

「マリちゃん♥♥♥おっぱいもみながら、ナカ出ししていい？いいよね？わたし
もマリちゃんの肉便器にびゅうう♥♥♥びゅうううう♥♥♥って射精したいな♥♥♥」
マリの身体がビクン♥とはねた。

「え？いや♥いやああああああ♥♥♥♥むりむりむりいいいい♥♥♥♥♥♥いま
中出し射精されたらとどめ刺されちゃう♥♥♥あたしのふたなりちんぽ人生が
終わっちゃう♥♥♥♥♥やめて！やめてえええええええ！！！」
「だーめ♥」

「はぎいいいいいい！！？」

ぴゆる♥♥♥ぴゆるるるるううう♥♥♥

びゅうううう♥♥♥びゆるるる♥♥♥

「あふ♥らめらめええええ♥♥♥おちんぽおおきくなってりゅ♥♥♥おっぱいいじめ
られてりゅ♥♥♥♥」

ぴゆるるるるう♥♥♥どぴゅうううううう♥♥♥びゅびゅううう♥♥♥♥

びゅびゅびゅううう♥♥♥♥びゆるるるるうううう♥♥♥♥

「ああああああああ♥♥♥♥あぐあぐううう♥♥♥おほおほおほおほ
おほ♥♥♥♥しゅご♥♥♥♥射精量やばすぎりゅうううう♥♥♥♥ごわれりゅうう
♥♥♥♥肉便器マンコこわれりゅうううう♥♥♥♥♥♥」

どびゅびゅううう♥♥♥♥びゅばばばばばあばああああ♥♥♥♥ぶしゃああああ
ああああ♥♥♥♥♥どぴゅりゅりゅりゅううう♥♥♥♥♥♥

「動いて！勃起して！あたしのおちんぽ！まだちんぽでセックスしたいのに！やだやだああ！！」

「はあはあはあ♥♥♥あはは♥もうお精子も出なくなっちゃったねえ♥♥♥おちんぽもしっかり萎えて……かわいい♥ごめんねマリ……マリのふたなり奪っちゃって♥これからはイジメなんてしないでフツウの女の子として、生きていこうね♥」

「フツウの女の子に……なっちゃったよお……やだあ……ちんぽ勃起しないよお……」

「返事は？」

ズブン♥♥♥♥ズブウウ♥♥♥♥

わたしは再びちんぽをマリのマンコにぶっ刺した。

「あひいいいい♥♥♥♥は、はい！マリはフツウの女の子として♥レイナちゃんの肉便器として生きていきます！」

「そう♥イイ子ね♥♥えらいえらい♥」

「あひあひいい♥♥♥はい♥♥うう……ううう……アへ♥」

えへへ♥とひきつった愛想笑いをしながらふたなりイジメっ子の松里マリは萎えたちんぽを一生懸命シゴいている。

でも、マリのちんぽが勃起することはなかった。

もうどんなにシゴいても、他の女の子とセックスしても勃起できない身体になってしまったのだ。

「うう……なんで……ほんとにもう……ううう……ちんぽ勃起しないよお……」

そう、他の女の子では満足できない身体になってしまったのだ♥

「ねえ？まだ勃起したいの？」

「え？いえ……その……えへへ♥」

「そんなに勃起したいなら♥させてあげる……」

ずぶん♥♥♥ずぶぶふううう♥♥♥♥

「あひゃあああ！？レ、レイナちゃんのおちんぽがまた♥♥♥♥」

ピクピク……ピクン♥♥♥

わたしの身体に反応してあま立ちし始めるマリのふたなり萎えちんぽ♥

「あひいいいい♥♥♥すご！ちんぽすごおお♥♥♥レイナちゃんのおちんぽすごいい♥♥♥あ♥勃起♥♥あたしのおちんぽが♥勃起して♥♥♥♥がんばって！あたしのおちんぽ♥がんばって♥♥♥♥あひいいいい♥♥♥」

みじめで情けない声援を自分のおちんぽに送りながら、必死にちんぽをシゴくふたなりギャルのマリ。

あああん♥♥♥この学園当たりだわ♥♥♥

「これから楽しい学園生活できそうね♥んふうう♥♥♥」

わたしは初めてできた肉便器の友達に、ふたたび中出し射精をするのだった。

2. 勝手にフェラチオしてくる、躰のなっていないメス犬金髪ふたなりギャルのお口をふたなりちんぽでわからせてあげた。

「レイナちゃん♥おはよう♥♥♥」

「げっ……今日も来たの？マリ……」

早朝のアパートの前で待ち伏せしていたのは、ふたなりちんぽで暴れまわっていた元イジメっ娘金髪ギャルの松里マリだった。

極太ちんぽで制裁セックスして、わたし以外には勃起できないフツウの身体にしてあげたらなつかれてしまったのだ。

「もう、いい加減うざいんだけど……わたしは登校する時は一人がいいの！」

「またまたあ♥ほんとはあたしと一緒に登校したいくせに♥♥♥」

わたしの腕にデカイおっぱいを押し付けて、ほっぺをスリスリしてくるマリ。

「んふう……なつかれすぎた……ちょっと痛い目みせただけのつもりだったのに」

「マリはあ♥レイナちゃんのお友達でえ♥肉便器だからね♥レイナちゃんが精液ぶちまけたいときにいつでも射精できるように♥一緒にいてあげるの♥♥♥」

そんなこと言いながらもスカートを押し上げて、パンツからはみだし勃起しているのはマリのふたなりちんぽのほうだった。

わたしの極太ふたなりちんぽで犯して以来、わたしの身体でしか勃起できなくなったマリ。

身体の疼きをわたしでしか解消できなくなったマリは、わたしの友達の肉便器としていつも一緒にいるようになってしまったのだ。

「どうせ、コレ目当てでしょ？」

ぎゅむ♥

公道で恥ずかしげもなく勃起させているちんぽを容赦なくにぎり、シゴきあげると甘い声をだして腰を引いた。

「ひゃあああん♥♥♥……ねえ♥♥♥レイナちゃあん♥学校行く前に♥♥その公園でえ……しょ？♥」

ムチムチした肉付きのいい金髪ギャルが上目遣いに、こびてくる。

かがんだ胸元は大きくあけられていて、豊満なおっぱいがこぼれおちそうなほどに、ゆるいブラのうえで揺れていた。

「んふう♥しょうがないわね……」

マリのちんぽを握りしめたまま、公園の便所を目指し歩く。

「ちょ♥やば♥♥ちんぽにぎったまま歩かないでよ♥♥♥あああん♥まって！まってえ♥♥♥」

うるさいやつだ。ピンっとスカートのごしに彼女のちんぽを指ではじき黙らせる。

「ひゃん♥」

～公衆便所～

「ほら、壁に手をつきなさいよ……そうそう♥お尻をこっちにむけて♥」

「は、はい……レイナちゃん♥」

ふたなり用の男性便器の壁に両手をつき、大きなお尻とバッキバキに勃起させたおちんぽをフリフリと振ってわたしにおねだりする金髪ギャル。

「いやらしい女。朝からなにちんぽガン立ちさせてんのよ……恥ずかしくないわけ？」

「うう……だって……レイナちゃんの臭い嗅がないとおちんぽ勃起できないんだもん♥朝立ちオナニーができなくなって、おマンコなぐさめるしかなかったしい♥」

やっぱりわたしに犯されたふたなりは、わたしでしか勃起できなくなるようだ。

「おマンコでオナニーしたならいいじゃない。おちんぽは我慢しなさいよ」

「や！ やだあ！ おちんぽもお♥おちんぽもシコシコしたいのお！ レイナちゃんのおちんぽで！ ズボズボされてぴゅっぴゅ♥射精したいの！！」

意地悪く微笑むわたしの下半身にすがりつく元イジメっ子。

許可もなくわたしのスカートを下げてパンツごしのふたなりちんぽにほおずりして、なめ始めるマリ。

「誰が勝手におちんぽなめて良いついていったのよ！ この躰のなっていないメス犬！」

ぶるん♥べっちいい♥♥♥♥

「はひ♥ぶたれた♥レイナちゃんのおちんぽでほっぺぶたれたあ！」

ぶるるん♥♥♥べちいい♥♥♥

「ひゃん♥またあ♥♥♥ああんすごい臭いが鼻に♥♥来ちゃう♥♥♥レイナちゃんのおちんぽ臭で勃起しちゃう♥♥♥」

「だから！ 勝手に発情しておちんぽ勃起させてんじゃないわよ！ ほら！ おちんぽ欲しかったらワンって鳴きなさい！」

ぶるん♥♥♥べっちいい♥♥♥

「ひいいん♥♥♥は、はい.....わ、わん♥ワンワン♥♥♥レイナちゃんのおちんぽくださいワン♥♥♥ひゃん♥♥♥」

ぐりぐりい♥♥♥ぐりぐりい♥♥♥

「そう♥コレがそんなに欲しいの？ 犬のまねまでして？ わたしのおちんぽがそんなに欲しいんだあ♥♥♥んふう♥♥♥」

マリのエロいギャル顔が、いびつに歪むほどちんぽを頬にねじこんであげる。

「わん♥♥ワンワン♥♥♥レイナちゃんのおちんぽほしいれす♥♥♥ワン♥♥」
ゾクゾク♥背中から腰にそしておちんぽに言い知れない感覚が流れる。

「そう♥じゃあその可愛いくちびるをわたしのおちんぽでこじ開けてあげる♥♥♥
ほら♥ほらああ♥♥♥」

「んぐう♥♥♥ひゃい♥♥んちゅ♥♥♥んうん♥♥んぐううう♥♥♥♥♥」

真横からおちんぽを唇にねじ込む。愛らしいピンクの唇に同じピンクのグロテスクな亀頭がおしつけられて、無理やりに開いていく。

唾液と先走り汁が混ざりあい、口内の横へほっぺを内側からちんぽが突き上げる。

「んぐうう♥♥♥れいなひゃん♥♥♥れいなひゃんのおちんぽ♥おいひいい♥♥♥」

「んふう♥♥♥ちゃんとわたしのおちんぽで歯磨きフェラするのよ♥♥ほらコスコスしてあげる♥マリの口を丁寧にわたしのおちんぽで犯してあげるんだから♥♥♥」

ぐふ♥♥♥ぐふふふ♥♥♥きゅふ♥♥♥くぼくぼ♥♥♥

「んぐうう♥♥♥んほおお♥♥♥ふんぐうう♥♥♥♥」

マリの温かくていやらしい口のせいで、極太巨根に勃起したわたしのちんぽが、口内を真横に犯す。

出し入れするごとに右のほっぺが内側から突き上げられて、唇がいやらしくゆがむ。

「ああああん♥♥♥いいわあ♥♥♥マリの口気持ちいい♥♥♥ちんぽ大きくなっちゃった♥♥♥んふううう♥♥♥最高よマリのいやらしいフェラ顔♥♥♥

まさにメス犬ね♥ちんぽ美味しそうにほおばって♥しっぽみたいに勃起ちんぽふるんふるん♥震わせて♥んふう♥可愛い♥♥♥」

「ひゃん♥♥わん♥♥♥んぐううふうう！？んぐうう♥♥♥」

2話サンプルEND

3. Wちんぽでマーキングフェラ。金髪ふたなりギャルのちんぽを蹴りあげ、踏みつけ謝罪射精させてあげた。

「先生遅刻しましたー♥」

「遅れましたすいません」

公園のトイレでふたなりセックスしていたら2時間ほどたってしまっていた。

まったく、金髪ギャルの松里マリには困ったものだ。

今もわたしのうでを自分の巨乳に押し付けてむにゅむにゅ♥セックスアピールしてくる。

わたしのふたなりちんぽでメス犬肉便器にしてあげたのに、全然立場が分かっていない。

んふう.....わたしは静かに勉強したいのに。ようやく授業を受けられると席に着こうとしたのだが.....

「マ、マリちゃん！こんな時間までふたりで.....な、なにしてたんですか！？」

誰だろう？わたしたちの席をさえぎるように、黒髪で、短いツインテールのメガネ娘が立ちはだかっている。

「はあ！？あたしとレイナちゃんが、どこで何してたってあんたには関係ないでしょアヤ」

「あー宮園アヤさんだっけ？わたしの席にもといた子」

マリの隣にいたのに、蹴り飛ばされて強制的に席替えさせられていた地味な子。

転校初日はあまり印象に残らないかんじだったけど、こうしてみるとかなりかわいい♥

ちいさな身長なのにおっぱいも大きくて、メガネの奥の瞳も大きくてパッチリしてる。

前髪が長いせいで暗い感じに見えるし、なんかおどおどしてるのが逆にゾクゾクしちゃう♥

ふーん、マリがイジメちゃってたのもわかる気がするわね。でも、イジメのターゲットがわたしに移ったんだからよかったのに、なんで絡んでくるんだろう？

「と、とにかく、ちょっと来てください！」

「はあ！？調子のんなし！レイナちゃんもいこう！地味子のくせにわからせてやるんだから！」

「な、なんでわたしまで！」

マリに引っ張られてわたしたち三人は、教室をでていく。

「はあ……3人とも放課後、居残りよ。特別指導室に来なさい」

「ええ——！！」

水瀬先生はそれだけ言うと、我関せずと授業を始めてしまった。

うう……なんでこんなことに……

～ふたなり便所～

いつも通り来たのはふたなり用トイレ。

「ほら♥マリちゃんアヤのおちんぽすごいでしょ？ちゃんと謝罪フェラしてよお♥」

パンツを脱ぎ棄て、ガニまたでちんぽをさらけ出しているマリの顔に巨根が押し付けられている。

「ふう♥ふう♥ちょ、ちょうしにのるなあ♥♥♥ちよつとちんぽデカいからってえ♥♥♥んちゅ♥ちゅぷちゅぷ♥♥♥」

反抗的な口ぶりだが、わたしの言いつけを守って宮園アヤのちんぽをしゃぶるマリ。

「そうそう、これまでアヤさんをイジメてきたぶんふたなりフェラ謝罪ちゃんとするのよ？んふう♥これで許してもらえるかな？アヤさん」

ちゅぷ♥♥ちゅる♥♥ちゅるる♥♥♥ちゅぷ♥♥♥ちゅぼちゅぼ♥♥♥

「あ♥ああ♥ああ♥♥♥♥イイ♥マリちゃんの情けないひよつとこ顔そそっちゃう♥♥ほら♥もつとしっかりくわえて♥♥♥アヤのおちんぽを気持ちよくさせて♥♥♥」

わたしの言うことなど聞いていないようだ。金髪ギャルのイジメっ子だったマリが自分のおちんぽをしゃぶっている快感に夢中だ。

ちゅぷ♥♥ちゅるちゅる♥♥♥ちゅぷうう♥♥♥

「はあはあ♥♥アヤのおちんぽこんなにデカかったんだ♥♥♥うう.....これじゃあ.....あたしのおちんぽが一番ちっちゃいじゃん.....はぶう！？」

「なにぶつぶつ言ってるんですか？そんなことよりアヤのおちんぽで感じてください♥♥♥これまでみたいにマリちゃんのよわよわ早漏おちんぽでアヤのおマンコにぴゅっぴゅ♥ぴゅっぴゅ♥♥無責任中出ししてください♥♥♥♥」

自分のちんぽをしゃぶらせながら、オスの臭いでマリのちんぽを勃起させようとするアヤ。

しかし.....

「うう！なんで！なんで勃起してくれないんですか！？」

アヤの巨根ちんぽの臭気をあびながら、メス犬謝罪フェラをしてもマリのふたなりちんぽは萎えたままだ。

「この！この！パンツ脱ぐ前から完全勃起するような童貞ちんぽだったくせに！アヤのおちんぽに臭いで♥味で♥完全勃起しろ！おら！なめろ！しゃぶれ！飲み込め！はうううん♥♥♥」

「ふぐうう！？マジで調子にの……ひゃう♥♥♥んぼおお♥♥♥んぶふ♥♥♥んぐんぐ♥♥♥んぐううう♥♥♥♥♥♥」

巨根を根元まで押し込められ、白目を向きながらお口ご奉仕しつづけるマリ。

やはり、マリのおちんぽはわたし以外の女の子には反応しないようだ。

ちゅぶちゅぶ♥♥♥んぼおおお♥♥♥んちゆるうう♥♥♥♥

アヤの巨根が容赦なくマリののどを犯す。涙をいっぱいにつめていたマリの顔が情けなくて♥思わずわたしも勃起してしまった♥

ぶるるん♥♥♥

「ほら♥マリ♥おあずけだったわたしのおちんぽだよ♥あは♥お鼻に亀頭押し付けちゃう♥♥わたしの臭い嗅いで勃起しちゃいなさい♥♥♥」

「ふごおおお♥♥♥んんう♥ふごふご♥♥♥♥ふごふごふごおおお♥♥♥♥」

口をのどをちんぽで埋められて、必死に呼吸するマリの鼻にちんぽを押し当てるとブタのようにふごふご言いながら臭いをかぎ始める。

「くっ……勝手に割り込まないでよ！あんたのちんぽなんかでマリちゃんが発情するわけ……で、デカイ！？」

アヤのちんぽもデカかったが、やはりわたしの完全勃起ちんぽにはかなわないようだ。そのうえ……

「ふごごごおおおおおお♥♥♥♥♥♥」

わたしの身体でしか勃起しないマリは、ちんぽの臭いを嗅いだ途端に完全フル勃起してしまうのだった。

「なんで！なんでマリちゃんは！こんな女に！この！この！アヤのちんぽのほうがいーだろ！アヤのちんぽで謝罪射精しろ！」

「さっきから聞いていたら勝手なことばかり言って♥マリの身体はわたし以外の女には反応しなくなったの♥ほら♥マリ♥わたしのちんぽでいいなり射精しなさい♥」

無理やり、アヤのおちんぽを押しつけマリの口にわたしの巨根もねじこむ。

「ふごおおお♥♥♥あがああああ♥♥♥♥♥あがああああ♥♥♥♥♥」

ふたつの巨根を口に無理やりねじ込まれて、えぐいエロ顔になりながらマリは舌先でちろちろとご奉仕を忘れない♥

「そうそう♥やればできるじゃない♥あんたのために巨根をしゃぶらせてあげてるんだからね♥感謝しなさい♥」

わたしの言葉にうなづくように、マリのちんぽがヒクンヒクンとゆれうごく。

「マリちゃん！アヤの♥アヤのおちんぽのほうが気持ちいいよね？こんな泥棒猫のおちんぽよりアヤのおちんぽのほうが気持ちいいもんね？」

しかし、ちんぽはピクリともしない。

「返事しろ！くそザコちんぽ！アヤのアヤ様のおちんぽが世界一だってちんぽ揺らして謝罪しろ！これまでイジメられてきてやったのに！イキってるマリちゃんが可愛かったのに！何勝手に他の女のメス犬肉便器になってんだよ！おらああ！！！」

「ぴぐううう！！！！？？？」

ビッグググン♥♥♥♥♥

ぶしゃああああ♥♥♥♥♥ぶりゅびゅるるるるるううう♥♥♥♥♥

アヤの蹴りがマリのちんぽにクリーンヒットして、その途端大量の精液がわたしたちのちんぽにぶっかけられた。

3話サンプルEND

4. 寝取られたと逆恨みしてくる巨根ふたなり地味娘を、陰キャなメス犬に戻してあげた。

兜合わせで射精したにも関わらず、勃起がおとろえない宮園アヤのふたなりちんぽ。

むしろわたしとのふたなりちんぽバトルを喜ぶかのようにビクンビクン♥と脈を打ち、さらに太く長くなっていくアヤの巨根。

「どうしました？アヤのちんぽにおじけづいたんですか？アヤのちんぽはマリちゃんみたいに一発発射しただけでふにゃチンになるような、ヨワヨワイキリちんぽじゃありませんよ♥」

「そうみたいね♥アへりながらお射精して自分だけ気持ちよくなって萎える情けないマリのおちんぽとは一味ちがいそうだわ♥」

「あの一。なんかあたしのちんぽだけディスられてる？」

踏まれて射精した弱小ちんぽをぷらぷらぶら下げて、金髪ギャルのマリがぼやく。

「マリちゃんのヨワヨワイキリちんぽはアヤのモノなんですううう！！！」

「マリの情けない身勝手ちんぽはわたしにしか勃起しないのよ！！！」

ぶべちいいいいいいん♥♥♥♥

「ふひゃああああああん♥♥♥♥」

両側から極太勃起ちんぽでビンタされてマリが吹き飛ぶ。

ずりゅ♥♥♥ずりゅりゅ♥♥♥♥♥にゅぷぷぷうう♥♥♥♥

ちんぽとちんぽをふたたび重ね合わせる兜合わせ。

にゆるにゆるのお互いの精液がちんぽと絡み合い、快感をダイレクトに伝え合う。

「うぐ♥き、きもちいい♥♥♥レイナちゃんのちんぽ♥んふう♥♥♥」

「すご♥アヤさんのちんぽ♥ちんぽ♥ああん♥感じちゃう♥♥♥」

ちんぽとちんぽのつばぜり合い♥ガッチガチに勃起したふたなりちんぽがグイグイとお互いのちんぽを押し付けあう。

「はあ♥はあ♥我慢なくていいんですよ？アヤのちんぽにゆるにゆるで気持ちいいですよ？どぴゅどぴゅ♥情けない降伏射精してください♥」

「冗談♥まだまだ余裕よ♥あんたこそぴゅっぴゅ♥白い敗北射精したいんじゃないの？カウパーどろどろ出てるじゃない♥」

にゆる♥にゆぷぷ♥♥♥にゆりゆん♥♥♥にゆりゆりゆん♥♥♥にゆっぷう♥♥

「あ♥あああ♥♥♥♥♥♥ダメ♥アヤまた♥またイっちゃう♥♥♥レイナちゃんのおちんぽ兜合わせで♥♥♥♥イっちゃう♥♥♥」

「イって♥アヤさん♥♥わたしのちんぽで情けなくぴゅっぴゅ♥してえええ♥♥♥」

にゆる♥にゆりゆりゆりゆううう♥♥♥♥

「ひぎいいいい♥♥♥イっく♥♥♥いっくうううう♥♥♥♥♥」

びゆる♥びゆるるるるう♥♥♥♥♥

「「ひゃああん♥♥♥熱い♥♥♥♥」」

兜合わせでいった♥アヤの精液がわたしのちんぽとマリの顔面にぶちまけられる♥

「あひいい♥♥♥きもちいいいい♥♥♥♥レイナちゃんのおちんぽきもちいいいい♥♥♥♥」

びゆるびゆる♥びゆるびゆる♥しゅこしゅこ♥♥♥

射精しながらなおもわたしのちんぽに、自分の情けない敗北射精ちんぽをすりつけてくるアヤ。

「んふう♥♥♥可愛いじゃない♥♥♥アヤさん♥マリみたいにメス犬肉便器として仲良くしてあげてもいいんだからね♥」

降参してすりよってくる猫みたいに愛らしいアヤのちんぽに油断したわたし。

「あはあ♥♥♥お断りですう♥♥♥えい♥♥♥」

ずりゆうん♥♥♥♥ぶちゅ♥♥♥♥

「ひ？ひぎいいいい♥♥♥♥♥ちんぽ♥ちんぽ♥おマンコにきたああああ♥♥♥♥」

油断した瞬間に、アヤのちんぽが深々とわたしのナカに突き刺さっていた♥

「あ♥ああああ♥♥♥ダメ♥♥♥そんな♥初めて♥初めてなのに♥♥♥」

わたしの処女がまさか、こんな地味な子に奪われるなんて♥♥♥

「あ————！！あああ————！！アヤ！お前！レイナちゃんの処女！あたしが狙ってたのにいい！！！」

顔面精液まみれのマリがわめく。あんたに捧げる気は無いんだけど……

ってやば♥♥♥アヤのちんぽ♥ナカでどんどん大きくなってる♥♥♥♥

4話サンプルEND

5. エピローグ 教育的指導と言いながら、ふたなりフェラチオを強要してくる爆乳教師を金玉が枯れるまでしゃぶりつくしてあげた。

この学園での生活もなんとか平穩に過ごせそうである。
一時はどうなるかと思ったけど、これから毎日トイレには困らなそう♥

さて、あとは呼び出しくだった先生のご機嫌をとらなきゃだね♥

ちなみに同じく呼び出されたはずのマリとアヤは逃げ帰っていた。

まったく困ったものだ。だけどわたしはあのふたりとはちがうのだ。

あくまでわたしはちゃんと勉強したいだけのふつうのふたなり学生なんだから！

長く続く廊下の突き当り、特別指導室と書かれた部屋の扉をノックする。

「失礼しまーす」

入るなりわたしはしっかりと頭を下げた、こういうことは何事も最初が肝心なのだ。

反省してるとちゃんとわかるように、わたしは深々と頭を下げて謝罪する。

「先生すいませんでした。これからはちゃんと真面目に授業を受けますので……ゆるし……え？」

頭を下げた、わたしの目の前にちんぽがあった。

それもすっごく長くてカリ首が大きいやらしいちんぽが。

「水瀬……せんせい？」

顔を上げたわたしを見つめていたのは、白いブラウスをはだけさせ爆乳をあらわにした完全にメス顔の淫乱教師だった。

「だめよねえ？風見さん♥授業ほったらかして、トイレで不純同性交友なんて♥ハ・ル・カ先生が♥しっかり指導してあげますからね♥♥♥」

いやらしい大人の女の身体に、長く淫靡なふたなりちんぽを完全勃起させた女教師、水瀬ハルカ。

「よ、よろしくお願ひします……ハルカ先生……あは、あははははは……はあ……」

「さあ♥はじめはどうするのかしら？優等生の風見レイナさん♥」

あきらかにちんぽをしゃぶれと、ほおに押し付けてくるハルカ先生。

めんどくさ……

仕方なくわたしは長ちんぽの先端をぱく♥とくわえる。

「ああああん♥♥♥こら♥だれが勝手におちんぽくわえてえ♥♥♥ダメじゃない♥♥♥ひゃあああん♥♥♥♥」

ちゅぶ♥ちゅぶ♥♥♥

はだけたブラウスの間から、ぶるんぶるん♥おっぱいを震わせ爆乳アピールをしてくるハルカ先生。

「ちっ……デカいからって見せつけてえ……ちゅぶ♥ちゅぼぼ♥♥♥」

「ん？なにか言ったかしら？」

「んふう♥♥♥♥んふふう♥♥♥♥」

わたしはちんぽをしゃぶりながら首を横に振る。

んふう……めんどくさいし……さっさと終わらせよう……

「あひゃああああん♥♥♥♥だめだめだめえええ♥♥♥♥ちんぽフェラうますぎいい♥♥♥♥ちよ♥まってまってえええ♥♥♥♥♥」

じゅぼじゅぼ♥♥♥♥ちゅぼぼぼおおお♥♥♥♥♥ちゅぶふう♥♥♥♥

「あふ♥すご♥レイナさんのフェラすっご♥舌が絡んでくる♥先生の長ちんぽに舌がからんで♥ゴシゴシしごかれてるううう♥♥♥♥♥」

じゅぶじゅぼぼおおおお♥♥♥♥♥ちゅぶん♥んふうう♥♥♥♥♥ちゅぶちゅぶ♥♥♥♥♥ちゅぼぼおおおお♥♥♥♥♥

ハルカ先生のふたなりちんぽの先端をしゃぶり、舌を絡ませしごき、喉の奥まで長ちんぽをおさめてあげる。

今度はこのどでちんぽをしごきながら、とっとと射精してもらうのだ。

「やだ♥そんな♥♥♥♥のどマンコせつま♥♥♥きつつ♥♥♥あ！ああああああ♥♥♥♥♥フェラチオ♥だけでイっちゃういく！いくいく！！！」

どぴゅうううう♥♥♥♥♥びゅるびゅるびゅるびゅるるううう♥♥♥♥♥
びゅう———♥♥♥びゅびゅ———♥♥♥♥♥

はい♥おわり～♥♥♥んふう.....ちよろい♥マリよりも歯ごたえないわね♥

「はあはあ♥やるじゃないレイナさん♥♥♥♥それじゃあこれから♥本格的に犯してあげ.....ひいひい♥♥♥♥やめてえ♥♥♥♥♥♥♥ちよっとお口からちんぽ離してええ♥♥♥♥♥」

だれが終わらせるか、わたしは早く帰って勉強がしたいのだ。
これから犯されてたら、帰りの電車に間に合わないでしょ！

じゅぶじゅぼぼおおおお♥♥♥♥♥じゅぶ♥♥♥んふうううう♥♥♥♥♥んふう♥♥♥♥♥
じゅぶじゅぶううう♥♥♥♥♥

「ひいひいん♥ちんぽから♥♥♥金玉から精子全部ぬかれちゃう♥♥♥♥♥やだああ♥♥♥レイナさんのオマンコ犯したかったのにいい♥♥♥♥♥」

とんでもない教師だ。ん？股間にかわいらしい膨らみがあるわね.....そうか.....こいつは金玉持ちか.....

わたしは、ハルカ先生の股間に手を伸ばし、ぶるぶらぶらさがるふたつのふくらみを手に取った。

「ひいいいいいい♥♥♥♥なによ！何するきよ！やめなさい！ちんぽしゃぶるのも♥♥♥金玉いじるのもおおお♥♥♥♥ひゃああああん♥♥♥♥♥」

さあ♥もう一度射精しろ♥金玉の中身も全部出しちゃえ♥♥♥♥

ぷちゅん♥♥♥♥♥

「あひゃああああああ♥♥♥♥♥キンタマああ♥♥♥キンタマああああ♥♥♥つぶれちゃ♥♥♥うっううう♥♥♥♥♥♥♥」

5話サンプルEND

体験版はここまでとなります。
続きは製品版でお楽しみください。

この作品はフィクションです。
実在の人物・団体・事件とは一切関係がありません。

18歳未満の方の閲覧はご遠慮ください。

無断転載・複製・複写・Web上への掲載
(SNS・ネットオークション・フリマアプリ含む)
は禁止です。

[エロバトルンの小説 - pixiv](#)

[エロバトルン \(@furizumu\) / X \(twitter.com\)](#)